

草木成仏の思想

金言と評される。しかし、実はこの言葉、仏教經典にない。いったい何を典拠にして成立した言葉なのか。誰が言い出したのか。

幾つか解明の手掛かりはある。例えば「涅槃(ねはん)経」には「一切衆生悉有仏性(すべての衆生は、いかにかく仏になる本性・可能性を持つ)の一文がある。この衆生は、有情とも訳される。仏教は、有情(心のはたらきを持つもの)と、非情(持たないもの。石や草木など)とに分類する存在論を持つ。「涅槃経」の場合、非情の仏性は含まれていない。山や川や草木が悟りを開いたりしないのだ。

しかし、東アジアの仏教におい

本書があるため、これまでのプロセス、つまり著者の思考履歴も誠に明示されている。

本書には、当時バッシングを受けた著者の「災害天罰論」の再論考もあり、末木自身の宗教思想的営為も読むことができる。草木成仏論を通して、現代人の環境・自然・災害観を問おうとするのだ。

本書を通して、改めて仏教思想史の魅力を強く感じることができた。地道に思想展開をたどる方法論を暗守しながら、仏教体系が内包するラジカルな性質を見事に抽出している。宗教的知性が鍛錬できるところである。

(サンガ・2160円)

末木文美士 著

「山川草木悉皆(しっかい)成仏」という言葉を「存続」したろうか。「山も川も草木も、ここどこまでべて成仏(悟りを開く)する」を意味し、仏教の領域だけでなく、しばしば日本の思想論や文化論などで取り上げられる熟語だ。能楽の詞章や文学にも登場し、時に日本其自然観・生命観の神髄を表す

仏教体系のラジカルさ抽出



■評者
釈 徹宗
(相愛大教授)

ては、この非情が成仏することを認める論議が盛んになる。特に日本平安期の天台宗学僧・安然の主張は独創的だ。何と安然は「非情である草木がそれ独自で発心・修行する」という結論に達するのである。なぜ彼はそのような論を展開したのか。その理路を著者は丹念に解き明かしていく。読者は次第に草木成仏論の世界へと引き込まれていくに違いない。

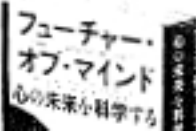
国際日本文化研究センター名誉教授の著者はこの大思想家・安然をテーマに博士論文を書いたことで知られ、同論文は加筆訂正の上で出版されている。その系譜上に



よしかわ・うしお 19
漢学評論家、小説家。97
歳。『風亭柳明一代記』で新田
書に「芝居の神様 島田
「戦後落語史」など。

フューチャー・オブ・マインド

ミチオ・カク 著、斎藤隆央 訳



「未来科学」の
フューチャー・
オブ・マインド
心の未来科学
湖邊書・1